

武田 尚子著

『20世紀イギリスの都市労働者 と生活』

——ロウントリの貧困研究と調査の軌跡

祐成 保志

本書は、貧困についての実証的な社会調査に取り組み、「貧困線」や「貧困サイクル」の概念を提起したことで知られるベンジャミン・シーボーム・ロウントリ（1871～1954年、以下「シーボーム」と記す）の多面的な活動を、膨大なアーカイブ資料の読解を通じて描き出した労作である。

シーボームの名は、チャールズ・ブースとともに、貧困研究の先駆者として社会調査史・社会政策史のなかに刻まれている。ブースはロンドン市民の約3割が貧困状態にあると指摘した。シーボームはイングランド北部の小都市ヨーク市をフィールドに、さらに徹底した調査をおこなった。栄養学の知見にもとづいて貧困を定量的に定義する指標を作成するとともに、全数戸別訪問によって世帯の家計を総合的に把握した。その結果、絶対的に収入が不足している「第一次貧困」が約1割、家計を適切に管理できていないために必要を満たせない「第二次貧困」が2割弱に達することが明らかになった。3年を費やした調査の報告『貧困——都市生活の研究』（1901年）は、自由党による「リベラル・リフォーム」の気運のなかで脚光を浴び、シーボームは若くして貧困問題の専門家と目されるようになった。

ただしそれは、シーボームという人物の、重要ではあるがひとつの側面でしかない。本書が教えるのは、彼が公的生活において少なくとも4つの顔——経営者、社会事業家、社会学者、政策立案者——をもち、さらに、いずれにおいても傑出した業績をあげたという事実である。

経営者としては、卓越した技術開発、従業員の能力を引き出す労務管理、巧みな市場開拓によって、家業であるチョコレート菓子製造業を発展させた。社会事



●ミネルヴァ書房
2014年4月刊
A5判・572頁・
本体8500円+税

●たけだ・なおこ
早稲田大学人間科学学
術院教授。

業家としては、ロウントリ一家が設立したトラスト（公益財団）の運営にかかわった。ロウントリ一家のトラストは、ワーキング・クラス向けのモデル住宅地の建設、調査研究への資金援助、論説紙の運営などを通じて社会改良運動の一翼を担った。社会学者としては、貧困研究はもとより、産業心理学、経営学、農業経済学の分野に貢献した。政策立案者としては、ロイド・ジョージのブレーンとして、戦間期における失業対策、土地政策の具体化に寄与するとともに、1940年代にはベヴァリッジ報告の作成に参加して第二次世界大戦後の福祉国家構想に大きな影響をあたえた。

このようにさまざまな顔をもったシーボームの、およそ半世紀にわたる歩みを丹念に追った本書は、いくつもの読み方に開かれている。まず、ロウントリ社という個性的な企業を中心とする産業史として読むことができる。それは、クエーカーの宗教的な信念に支えられつつ、営利企業の収益を社会に還元することを目指した社会事業史と表裏一体の関係にある。さらに、試行錯誤からはじまった社会調査が政党や大学のネットワークを通じて組織化され、社会認識の能力を拡張させてゆく過程は社会科学史としてきわめて興味深い。手記や書簡を縦横に利用しながら克明に再現された政策立案過程は、20世紀前半イギリスの政治史を理解するうえで大きな価値をもつだろう。そして、3次にわたるヨーク調査がとらえた貧困層の生活実態、ロウントリ社の内部資料から垣間見える勤労生活は、社会史あるいは民衆生活史を照らし出している。

いずれも、掘り下げれば十分に独立した研究として成り立つテーマばかりである。それでも、本書が一冊の書物としてまとめられたことには大きな意味がある。その最も顕著な成果は、シーボームの多岐にわたる活動を貫き、支えるものが何であったのかが明確になったことであろう。

シーボームは、大学で専門的な社会調査の訓練を受けていない。2年弱在籍したカレッジでの専攻は化学であり、ロウントリー社での最初の業務はチョコレート製造法の改良だった。20代のシーボームは、同社の実験室で、それまで生産工程の要であった熟練職人の暗黙知を、定量的に表現可能な形式知によって置きかえるという仕事に没頭する。なぜこれが「社会」調査の原点と言えるのか。本書の広範かつ細部にわたる記述から浮かび上がるのは、チョコレートという小さな商品を取りまく豊かな社会関係の広がり、それらに一つ一つ真摯に向かい合う「調べる人」(p. 55) シーボームの姿である。

チョコレートの原料は国外から輸入される農産物である。それゆえ、農業や貿易のあり方を左右する政治の動向に敏感にならざるをえない。それは大規模な装置を使って大量生産される工業製品であり、化学や機械に関する知識が欠かせない。ただし、いかに機械化を進めようとも人の手や感覚に頼る部分が大きいので、労働者の管理には細心の注意を払わなければならない。ロウントリー社は世界から原料を集め、販路を広げつつあるとはいえ、ヨークという都市に根ざしたローカルな企業であるがゆえに、労働力を培う環境としての地域社会の荒廃は防がなければならない。何よりもまず食品であるから、その栄養学的な機能を熟知していなければならない。そして嗜好品である以上、食べることの楽しみを演出し、移り気な消費者をつなぎ止めねばならない。

このように考えると、「チョコレート会社の御曹司」と「貧困調査」という、一見すると奇抜な組み合わせ、さらには後年、外在的な理由で拡散していったかに見える調査テーマ群が、じつは必然と呼びうるほどに結びついていたことが理解できる。その核には、モノに働きかけることで価値を生み出す「産業」という営みがあった。

そして「調べる人」は、けっして調べるだけの人で

はなかった。シーボームにとって調査は、社会の状態を客観的に把握し、改良の課題を見出すための手段であった。では、どのような社会を目指すのか。本書は、ロウントリー家と私的にも親交の深かった新自由主義派の経済思想家ホブソンが与えた影響に着目している。

ホブソンは富裕層の「過剰貯蓄」、すなわち不生産的余剰(不労所得)の蓄積が貧困や失業の要因であると説いた。新自由主義派は、貧困を単なる物質的な欠乏としてではなく、自己実現の機会が奪われた状態ととらえる。国家の役割は、過剰貯蓄を租税によって吸収し、機会均等を通じて積極的自由を保障することである。稼働所得と不労所得を区分し、所得税率を引き上げ、相続税・財産税の累進性を強化し、土地増価税を新設した蔵相ロイド・ジョージの「人民予算」(1910年)は、この考え方にもとづく。

政策立案者としての初仕事である自由党の土地問題調査(1912～13年)で、シーボームは土地所有者の不労所得に対する課税と、賃借権者の地位向上を主張した。この提案は、土地の価値を生み出すのは所有者ではなく、その土地を利用し、資本と労力を投入する者たちであるという信念に支えられている。貧困問題と土地問題への関心は、人間と土地の潜在能力を十分に発揮させ、資源配分のゆがみを是正して社会の「効率」(efficiency)を高めるという目標において重なり合う。ここでもまた、産業資本家の立場が貫かれる。

読者は、本書から多くの知見と洞察を得ることができだろう。上に述べたのはそのなかのごく一部にすぎない。ただ一方で、評者にとってはいくつかの疑問も残った。

第一に、本書で用いられた資料それ自体について論じる必要はなかっただろうか。どういう経緯で、ヨーク大学がロウントリー家およびロウントリー社の資料を所蔵することになったのか。また、資料はかなりよく整理された状態で保存され、研究者に広く公開されているようだが、アーカイブの作成、維持にはたいへんコストがかかっていると思われる。誰が何のために残し、費用を負担しているのか。こうした点の検討は、資料批判の前提としても重要である。本書を読むと、あらゆる資料が残されているように錯覚してしまうが、この資料群に何らかの偏りはないのだろうか。

そして、アーカイブに所蔵されている資料のうち、本書はどの部分に光を当てたのだろうか。

第二に、本書では、シーボームの多様な活動のあいだの、見事というほかない相補性が描かれているが、はたして、それらは互いに矛盾することはなかったのだろうか。例えば、経営者の立場と社会事業家の立場が調和するとは限らない。だからこそ産業心理学や労務管理が活用されるのだとしても、綻びが生じることはなかったのか。その一端は労使交渉に関する資料から示唆されている。より公平な視点から記述するためには、違った立場から編まれた資料によって補完する必要があるだろう。

第三に、本書は、どのような研究の系譜上に位置づけられるのだろうか。前述のように、本書はさまざまな角度から読むことができるので、特定の文脈に限定するのは適切ではないのかもしれない。しかし本書の独創性は、アーカイブ資料にもとづく歴史社会学という新しい研究領域を開拓したところにある。そのため的方法的規準が提示されていたとすれば、本書の意義はさらに鮮明になったと思われる。

すけなり・やすし 東京大学大学院人文社会系研究科准教授。社会学専攻。
